



王であるキリスト (ヨハネ 18:33b-37)

王であるキリストのために部下は戦う

年間最後の主日「王であるキリスト」の祭日を迎えました。来週からは待降節で、新しい一年が始まります。ついでの話ですが、来週の待降節以降葬儀が入った場合、守るべき祭日・待降節・四旬節・復活節の主日はミサを伴わない「ことばの祭儀による葬儀」を行うこととなります。ご協力をお願いします。

最近太ったなあ実感する出来事がありました。バイクを動かすためにヘルメットを装着しました。するとほおがヘルメットの中で圧迫されて、非常に窮屈だったのです。顔に肉が付いて、窮屈になっていました。

ヘルメットはいちばん大きなサイズを買っているので買い換えることはできません。そこで安全の保証はできませんが、ヘルメットの内側は発泡スチロールなので、内側を金づちで均等にたたき続けます。すると発泡スチロールが潰れて、隙間ができ、少し楽になります。

ここで考えたのですが、ヘルメットの内側をたたくとヘルメットの安全性が犠牲になりますから、ヘルメットではなく、私の頬を金づちでたたいたら、ヘルメットの中で隙間ができるのではないか。そう思って金づちを手にとってみたのですが、思い直しました。一月の駅伝大会にひょっとしたらまた声がかかるかも知れないので、顔がもう少し小さくなるように、努力しようと思っています。

さて今日与えられた福音朗読の中で、「わたしの国は、この世には属していない。」(18・36)という言葉に目を留めました。この言葉だけで、イエスの御国があること、そうであれば、イエスの御国に属している人々もいることとなります。そこから考えて、では私はイエスの御国に属している人間なのだろうか、という問いもわいてきます。

ピラトの前でイエスは「わたしの国は、この世には属していない」と言い切ったので、ピラト自身もイエスの御国に属していないことを突きつけられ、態度決定を迫られています。その場ですぐにイエスの御国に属する人間となることを選べば、ピラトはイエスをユダヤ人に引き渡さなかったことでしょう。

実際イエスは、「もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。」と言っています。ですが実際には、その場でイエスがユダヤ人に引き渡されないように戦った人は現れなかったのです。

ではイエスの御国に属する人間が誰もいないということなのでしょう。そうではないと思います。イエスが十字架への道を歩む中で、イエスの元を離れなかった人々、イエスの仲間に加えられた人々がいたからです。ベロニカという女性、マグダラのマリア、イエスの愛しておられた弟子、何よりもイエスの母マリア。こうした人々は、王であるキリストがお選びになった道を最後まで離れなかったのです。

また、イエスの代わりに十字架を背負ったクレネのシモン、一緒に十字架にはりつけにされたうちの一人もまた、王であるキリストの道を共に歩んだのです。いったんはイエスから身を隠した他の弟子たちも、あとでは王であるキリストの道を自分たちの選ぶべき道と思い直し、使命を全うしました。

では、私たちは王であるイエスの御国に属する人間なのかと問うてみたいと思います。イエスの御国に属する人間は、信じない人の手にイエスを渡すまいと戦う人です。わたしはイエスが引き渡されようとしている時に、このような態度を取ることができるでしょうか。

ではイエスが引き渡されようとしている場面とは何でしょうか。私たちの周りで、あからさまに不正が実行されようとしているとしましょう。それはまさに、イエスが悪を行う者の手に引き渡されようとしている場面です。そうした場面で私はどれくらい不正と戦おうとしているでしょうか。

不正行為、悪口、嘘、いろいろな場面を見たり聞いたりしながら、戦おうとしないなら、そのたびにイエスは悪を行う者の手に引き渡されているのではないのでしょうか。私たちは時代や場所は違っても、ピラトの前に立たされている王であるイエスに、自分が御国に属している人間であると証明する必要があると思います。

私たちキリスト者が、王であるイエスを、悪意ある人々や信じない人々に引き渡さないと言葉や態度で努力する時、私たちは今の時代にあって御国に属する国民です。イエスの教えに反すると言って、イエスを引き渡さないよう努力する。弱さや力不足を認めながらも悪の力に抵抗する時、神の国は今ここに存在しているのです。